

座談会の記録

座談会ー劇場空間を活かしたまちづくり
福島県南相馬市原町区「朝日座」
岐阜県中津川市加子母「明治座」
「第7回 住まいとコミュニティづくりNPO交流会」では、午前中に「劇場空間を活かしたまちづくり」と題する座談会を開催しました。

近年、「住まいとコミュニティづくり活動助成」において、古い映画館や劇場の保存・活用に関する申込が多く見られるようになりました。また、各地で閉館した映画館等をNPOが運営して再オープンしている事例なども目にします。人々に親しまれた劇場施設は、地域文化の継承等にも大きな役割を果たしていると考えられます。

すでに地域の拠点として活用されている施設と、震災を踏まえこれから利活用を図っていくことを検討している施設に係る2団体のメンバーを迎えて、劇場空間と地域の活性化について議論を行いました。



1

朝日座を楽しむ会

福島県南相馬市原町区

南相馬市は、2006年に旧原町市、旧小高町、旧鹿島町の1市2町が合併して誕生した。福島県浜通りの北部にあり太平洋に面している。千年以上の歴史を誇り、国の重要無形民族文化財「相馬野馬追」の開催地としても名高い。旧原町市の区域が現在の原町区で、南相馬市の中心的な地区である。この原町区のメインストリートから少し入ったところに、朝日座は位置している。

南相馬市の一部の地域に、福島第一原発事故に伴う警戒区域等が指定されているが、朝日座のある原町地区は対象区域外。

報告者 小畠瓊子氏

報告概要

1923年(大正12年)、原町の旦那衆12人が「旭座組合」を設立し、工事費1万3千円で芝居小屋として旭座(朝日座)を建設した。当初旦那衆の間では、女学校をつくりたいとの意向があったようだが許可が下りず、秋田県の康楽館(1910年建設)を模して芝居小屋となつたようだ。

1952年頃、映画館に改築され樹席や花道などが塞がれて、旭座から朝日座へと改名され映画隆盛の時を迎えた。その後、

国際文化交流会「曼珠沙華」公演。市民の皆さんがステージ上の出演者と交流しました。

映画産業の衰退で1991年に閉館した。閉館後にTMO推進事業の中心市街地活性化の核として、朝日座が取り上げられたこともあったが、具体化しなかつた。

2008年、行政によるまちづくりの講習会が行われた際に、朝日座の存在意義を講師から指摘され、朝日座を保存しようという機運が高まり、「朝日座を楽しむ会」が設立された。

会では、これまで朝日座を会場にして、名画の上映、シャンソンとフランス映画を楽しむ「パリ祭」や映画ポスター展の開催などを行って、地域住民への周知に努めてきた。

朝日座の3.11の被害は、映写機が倒れた程度で微々たるものだった。6月12日に開催した「復興上映会 in 朝日座」では日本映画の「いつでも夢を」を上映し、まちなかに住む市民同士の安否確認や再会の場となつた。朝日座周辺は放射線の線量が0.3程度と比較的低いこともあり、文化庁のフィルムを借りた映画祭や寄席、そして、選考委員長の鈴木先生に紹介していただいた、永島敏行さん(俳優)を招いたイベント(永島さんのトークショー、新鮮な農産物の販売や映画の上映会)を実施したいと考えている。



「朝日座を楽しむ会」の青年部が制作した幸福の黄色いハンカチ。



加子母マップに掲載されている明治座の案内。加子母に住み着いた芸術家たちが地元の有志と共に明治座の活用に取り組んでいる。

2

明治座活用委員会

岐阜県中津川市加子母

人口3千人ほどの山あいの地域で、岐阜県東濃地方の北端で長野県と接している。面積の94%が森林で、伊勢神宮で20年に一度行われる式年遷宮の御用材が育つ木曽ヒノキ備林がある。良質な木曽ヒノキがたくさんあったことから、江戸時代は尾張藩の飛び地領だった。明治初期には山林が全戸に払い下げられ、ほとんどの住民が現在でも山を持っている。2005年、加子母村は、恵那郡坂下町、川上村、付知町、福岡町、蛭川村及び長野県山口村とともに中津川市に編入合併された。現在の加子母地区は、旧加子母村にあたる。

報告者 内木哲朗氏

報告概要

明治座は、1894年(明治27年)に建てられた芝居小屋で117歳を迎える。明治20年代は芝居小屋がどんどん建てられた時代で、岐阜県の東濃北部だけでも約70軒が建てられている。東濃の村芝居、西濃の花火は県下の二大わざらしいと言われていたそうで、若者が仕事を放り出して傾倒していたと、当時の新聞に記載されている。明治座は、創建にかかる記録が残っていたことが、1972年(昭和47年)の文化

財の指定につながつた。明治座の建物は木造で巨大な梁があり、廻り舞台や花道を備えている。戦後リニューアルされ映画ブームの波に乗ったが、その後テレビの普及でさびれてしまい、歌舞伎や子ども向けの映画会などを開催したものの、集客するまでには至らなかった。

1996年(平成8年)、新劇と歌舞伎の融合芝居が明治座でつくられ上演されることをきっかけとして、明治座の名称が知られるようになった。この芝居の開催を契機に「加子母村起こし実行委員会」が結成された。

1997年(平成9年)から1999年(平成11年)の3カ年にわたり、文化のまちづくり事業として補助を受けて、村に残る伝説を基に創作歌舞伎をつくって上演した。これ

には200人ほどの人が関わり、明治座を核とする活動の素地ができた。音響や照明なども自分たちで行い、スタッフもたくさん必要となり、「風おこし応援団」もできた。

明治座の通年開館を目指して、2001年(平成13年)に農水省の補助を受けた。「明治座活用委員会」はそのときに立ち上げられた。通年開館の効果は、いろいろな宣伝ができる広告塔として、また、交流



イベント時に大勢のお客さんで賑わう明治座。

拠点として多様な人が訪れることが挙げられる。外から来て住み着いた芸術家が中心となって「かしも通信」というコミュニティ誌を発行しており、その中に中津川市の広報が小さく掲載されている。これは地域の情報共有に役立っている。

明治座は、子ども歌舞伎、クラシックコンサート、落語、アマチュアバンドのコンサートなどに活用されていて、観光バスが月に50台訪れる。老朽化が著しく、屋根替えが目下の課題である。半分にして持ち帰ることができるヒノキの割札を、300円で来訪者に売つて募金をあてている。

また、現在は、150近い団体が参加する「むらづくり協議会」が立ち上がっている。将来は、明治座の見学料を無料から有料にするなどして運営していくことを検討している。これまでの明治座を取り巻く活動を通して、お金をかけることがいいことではないことがわかつてきた。どこでも資源は転がっているので、外から来た人がそれを教えてくれた。明治座は、人を寄せて人が集い、風が起きて新たな人が入るという人の連鎖を生み出す大事な施設だ。今後も上手に活用していかたい。

座談会－劇場空間を活かしたまちづくり－



○パネリスト

小畠瓊子氏

朝日座を楽しむ会（2011年度「住まいとコミュニティづくり活動助成」対象団体、福島県南相馬市原町区）

内木哲朗氏

明治座活用委員会（岐阜県中津川市加子母）

○コーディネーター

鈴木輝隆氏

「住まいとコミュニティづくり活動助成」選考委員長、江戸川大学教授

震災の被害を受けた町に残る映画館

—鈴木 これから短い時間ではありますが、町の中にある映画館や芝居小屋といった劇場が、まちづくりや地域にとってどんな意味があるのかといったことについて、お二人に語っていただきますが、その前に、この会を企画することになった背景について簡単に述べたいと思います。

ハウジングアンドコミュニティ財団が、今年度の助成対象として南相馬市の朝日座の活動を支援することに決めたのは、去る2月のことでした。しかし、助成が決まったあと3月11日に東日本大震災が起こりました。

現地が大変な状況にあることを知った事務局は、「朝日座を楽しむ会」の小畠瓊子さんに連絡を取り、助成について相談をしたところ、小畠さんは「みなさん避難をしていて非常に不安ではあるけれど、朝日座を楽しむ会の活動はぜひ続けていきたい」とのことでした。

そこで、私と選考委員の高見沢実先生、事務局の大内さんが7月に小畠さんを訪ね、朝日座を含めて南相馬市内を案内していただきました。市内には津波の被害を受け、家が流されてしまった地域もあれば、テトラポットが内陸部に転がっているといった地域もありました。福島第一原子力発電所から20キロ圏内になっている区域もあり、田んぼでは米が作れないということでした。

それでも、南相馬の町を愛してやまない方々がいました。私は、そのことによって南相馬が救われているという感じがしました。町の中に映画館や芝居小屋などの劇場があるということが、私達を励ましてくれるし、日本を豊かにしていくのではないかと思い、本日の座談会を企画しました。そして、小畠さんの相手として、明治時代に作られた芝居小屋の再生と利活用を続けている、岐阜県中津川市加子母の内木哲朗さんに連絡をしました。加子母は戦国時代からある古い地名を持つ地域で、私が加子母を知ったきっかけは、平成の大合併で合併するかしないかを検討している時に訪ねたことです。

小畠さんと内木さんは今日初めてお互いの活動を知ったわけですが、まず最初にお互いの話を聞いて感じたこと、聞きたいことを話していただいて、会場のみなさんと理解を深めていきたいと思います。

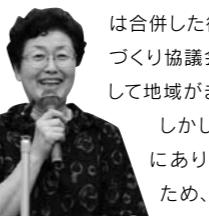
—小畠 明治座の話をお聞きして、まず思ったのは「うらやましいなあ」ということです。朝日座もかつては芝居小屋だったと聞いていますが、明治座のように木で作られているわけではありませんので、非常に羨ましく思いました。私たちは朝日座を芝居小屋には直すつもりはなく、これからも映画館として維持していくと思っていますが、やはり率直に「明治座はいいなあ」と思いました。

内木さんのさきほどの話を聞いていますと、加子母は合併した後も旧来の地域のつながりが強く、「まちづくり協議会」を立ちあげるなど、明治座を中心にして地域がまとまっているように感じました。

しかし、朝日座は南相馬市の原町という地域にあります、忘れられた存在になっているため、余所から来た人は「いいね」といつてくださいますが、朝日座の周辺の商店街は、

日本中のどこの商店街もそうであるように震災前から元気がなくなっています。そうした地元のみなさんの気持ちを朝日座に集めることは、なかなか難しいと思っています。

加子母では、「まちづくり協議会」を立ちあげて、今後さらに明治座を活用しようとしているということですが、どうやって地域の人に明治座に関わってもらえるようになつたのか、そのことを教えていただけますか。



小畠瓊子氏

外からの評価で見直された地域の劇場

—内木 会場のみなさんのお手元に配った資料の中に「加子母マップ」という地図があると思いますが、そこには加子母のいろいろな良さが漫画でわかりやすく盛り込まれています。しかし、よく見ればわかるように、加子母はこれといった資源がない地域です。

この地図を作ったのは、加子母に十数年前に住み着いたアーティストの方です。そうした人達が加子母には何人かいて、それぞれの方がライフワーク的にこうしたものを作り、地域の外にPRすると同時に、地域の内にもPRしてくれています。その活動は、外から来た人達が自分の場所づくりをしている面もありますが、こうした活動が地元の良さを引き出してくれている部分もあると思っています。

小畠さんは「朝日座への地元の支援が難しく、外から来た人の方がかえって評価をしてくれる」とおっしゃいましたが、実は、明治座についてもそうでした。それをどう変えていくかは加子母でも大きな課題でした。南相馬と同じように、やはり外から来た人が高い評価をしてくれたことで、地元の方が気づいたのです。そして、ごく一部の人だけが一生懸命に明治座を維持しようとしましたが、その運営はかなり大変なことです。地元の人はそのことも知っていますから、なかなか関わろうとしません。それでも外部からの評価を重ねていくことで「明治座はこの村になければならない施設なのだ」という意識を地元の人の中に育て、みんなで協力して取り組もうという態勢を作ることで、ようやく腰を上げてもらうこと

ができたのです。これはなかなか難しいことです。

—鈴木 内木さんの話を少し補足しますと、私は加子母マップを作ったイラストレーターの本間希代子さんにもお会いしましたが、こうしたアーティストが加子母に住んでいるのは偶然ではなく、旧加子母村が村の森林から搬出した木材を使ってモデル住宅を作り、村外のアーティストに無料で提供したことがきっかけだったそうです。無料で住んでもらいますが、そのかわりに町のことの手伝いをしてもらう、そういう人に住んでもらって村のことを一緒に考えてもらおうとしたのです。

加子母では毎朝6時に「加子母に帰ろう」という歌が流れます。この曲は合併による廃村後も村人の連帯感を大切に保つために、加子母小学校の最後の子どもたち全員に詩を書いてもらい、それを組み合わせて作られたのですが、この曲を作った方も、旧加子母村が積極的に受け入れた音楽家です。他にも、合併後も自分たちの地域の自治を作っていくために「かしも通信」という広報誌を作っている方もいます。さらに、木造の家づくりに関心をもった学生たちが、地元の工務店の指導を受けて木造建築の勉強をする「加子母木匠塾」という活動をしていたり、加子母は外の人に活動の場を作っていました。



鈴木輝隆氏

地元の木で作ったふれあいやかたには、研修目的であれば1泊1,000円程度で泊まれるようになっています。また、加子母には戦国時代から子どもや教育を大切にするという風土があると聞きました。他人の子どもを自分の子どものように育てるのを、当たり前だと思う文化風土があるということでした。

では、内木さんの方から小畠さんに聞きたいことがありますか？

朝日座の庶民文化が復興の力に

—内木 小畠さんが発表の中で朝日座の写真を見せて「この写真はいいでしょう、このアングルがいいでしょう」とおっしゃいました。朝日座の傷んだところの写真は可哀想なくらいでしたが、全体の街並みからみる朝日座の雰囲気はとてもいいなあと思いました。子どもたちが中に入っている写真を見ていると、明治座にも同じような要素があるように思いました。やはり時間がたないと出てこない味わいがあると思いましたね。

—小畠 いま、震災によって朝日座を心配した大学の先生方や文化関係の方々など、いろいろな方にお出でいただき、「朝日座よ、なんとか元気出せ、ここを使って何かをやろう」と声をかけていただいています。なかには、全面改修とまではいかなくても、もしかすると屋根とホールの天井くらいは直せるかもしれない期待させるような声もかけていただきました。私たちも基金を作り修理のためのお金を集めようとしてきたのですが、なかなかはずみが付きました。

内木哲朗氏

今回の震災は本当に悲惨です。私の知り合いも亡くなりました。原発の影響の中で若い人達はいなくなりました。私自身も若い人に逃げろ、妊婦さんにはもう帰つてくるなと言いました。戻れるようになるまで何十年もかかるかもしれないけれど、それまでは出ていきなさいと言いました。しかし、線量の低いところには人が少しずつ戻ってきていて、子どもたちもずいぶん増えました。特に夏休みに入って子どもたちが増えたので、昨日行われた劇団四季の無料公演では、当初は小学校4年生以上だった対象が、急遽6年生以上になりましたが、2回公演で1,300人以上に見せていただきました。

こうした事態であっても、私たちはなんとか生きていかなければなりません。そうした時に何が必要なのか。確かに経済的な協力も、私たちの努力も必要ですが、私は朝日座の庶民文化—エプロン姿で見に来られるこの大切さを町の中になんとか維持していくから、みなさんの応援をいただきながら維持していくからいいのかなあと思っています。

再生には維持と活用の両輪が必要

—鈴木 会場に、朝日座と一緒にうかがった選考委員の高見沢実先生がいらっしゃいます。高見沢先生は、選考委員会の時に「朝日座は絶対に外せない」と強力に推薦していました。何かお話をいただけますか。

—高見沢（横浜国立大学 教授） 私は、助成の選考の際に「朝日座を楽しむ会」の応募書類と朝日座の写真を見て、一気に惹きつけられました。屋根がちょっとめくれてしまつた写真を見て、これはなんとかしなければいけないとその時から朝日座ファンになりました。さきほどの内木さんの発表の中に「建物は人を惹きつける」という話がありましたが、その時の心境は、修理したいとかいうことよりもなにより朝日座の建物に惹きつけられたということだったと思います。

私が朝日座の建物をいいと思ったのは、震災前でした。震災が起こつて悲惨だからなんとかしようということではありません。もちろん、震災についてはとても心が痛みますが、日本中で町が衰退してきている中では、人が惹きつけられるものを中心にして、互いに連携をしながら町おこしができるといかなあと思います。

また、さきほどの小畠さんの発表の中で重要なのは、「朝日座の維持を楽しみながらやろう」というお話だと思います。日本中には私のような人間がたくさんいると思います。情報を出せば飛びついてくる人もいますし、映画ファンもたくさんいるはずです。何が当たるかはわかりませんが、朝日座とそこで上映する映画を楽しんでくださる人はたくさんいると思いま

すので、私も含めて楽しめたらしいなと思っています。

—鈴木 新潟県上越市には、今年で開館100年を迎える日本最古の映画館、高田世界館があります。ここ再開に関わっている関由有子さんが会場におみえのようなので、一言いただけますか？

—関（特定非営利活動法人 街なか映画館再生委員会 理事）

一昨年、昨年、今年とハウジングアンドコミュニティ財団から助成をいただいて、新潟県上越市の高田世界館の維持、再生の活動をしている「街なか映画館再生委員会」の関由有子と申します。高田世界館は1911年（明治44年）に開館した現役の映画館で、今年の11月1

日にちょうど開館から100周年を迎えることになります。ただ、さきほど鈴木先生は「日本最古の映画館」とおっしゃいましたが、もしもほかからもっと古い映画館がでてきたら困るので、「最古級」としておきたいと思います。

高田世界館も朝日座と同じように、最初は芝居小屋として始まりました。明治座ほど立派ではありませんが、以前は舞台の下に回り舞台もありました。しかし、1916年（大正5年）からは映画をやってきましたので、内部は大正ロマンのアールデコの素敵な映画館です。

私達は一昨年からNPO法人で建物を所有することになりましたが、古い映画館ではろぼろですから、維持していくためには修繕というハードの整備が必要です。これがもつとも追いついていないのが現実です。しかし、興行場として使わないと固定経費である地代や電気代などを払えません。この財団の助成金やほかの団体の補助を受けながら、椅子を直したりしながらの自転車操業で、四苦八苦しながらやっているところです。

高田世界館を再生するには、維持していくことと活用していくことの両輪で一挙いだと思います。そこで、私達は映画館以外の使い方もいろいろ模索してきました。その結果、例えば、クラムボン、永井龍雲、ピーター・バラカンといった世界館の雰囲気が好きなアーティストが来られるようになりました。明日は私も参加している「あわゆき組」という女性たちのグループが、読み語りの会を催します。普通の部屋でやるよりもおもしろい雰囲気になるのではないかと思っています。

ただ、雨漏りがひどくて、大雨になると「関さん、また漏れてる」と言われてビニールをかけたりしてきました。瓦屋根がぼろぼろなので瓦募金を始めました。一枚2,000円の瓦を買って、裏にメッセージを書いていただいている。この前は子どもたちにも書いてもらいました。その様子をホームページでも紹介しています。いろいろありますが、素敵な映画館ですから、みなさんも是非一度お出かけください。

人が集まると何かが起こる

—鈴木 最後に、お二人から会場のみなさんに伝えたいことがありますらどうぞ。



—内木 私は、実は東京生まれの東京育ちです。私が学生のころは全国に名画座というものがありました。私は受験に失敗した浪人中に、入場料350円くらいの名画座を渡り歩いていました。一日に3本も4本もの映画を夢中になって見ていました。その名画座がかつては芝居小屋だったかどうかは記憶がありませんが、非常にコンパクトだったと記憶しています。

いまではほとんど潰れてしましましたが、もしいまでもそれが残っていたとしたら、それぞれの地域のコミュニティの場として活用できていたかもしれませんし、映画を中心にして何か楽しいことができたような気がします。

明治座でも古い白黒映画を何度か上映したことがあるのですが、お客様がさつぱり入らず、冬のさなかに毛布をかぶって映画を見ることになりました。熱燗を片手に体を温めながら映画を見るということもあります。これはこれで乙なものでしたが、そうなると、これをイベントにしようといったアイデアも出てきました。

芝居小屋のネットワークには全国芝居小屋連絡協議会という団体がありますが、大きな小屋が中心になっているので、地域に根ざした、小さな芝居小屋や映画館のネットワークを作るのもおもしろいと思います。私は今後も、そういう芝居小屋のお手伝いを積極的にやっていきたいと思っています。昔懐かしい映画が好きな人もたくさんいると思いますので、いまではもう見られないような古い映画を上映するのもいいでしょう。そういう映画が好きな人に全国から集まつてもらう。人が集まると何かが起こるということを実感してきましたから、なんとか人が集まるような企画を続けたいと思っています。

—小畠 実は、私も朝日座がある原町の生まれでも育ちでもなく、宮城県で生まれ、仙台で仕事をしてい

ました。いまから34、35年前に原町に移つてから朝日座を知ったわけです。

「朝日座を楽しむ会」を立ちあげた後で、地元の道の駅の社長さんから、かつて朝日座で上映された映画のポスターをコピーするということで、お金を出していただきました。市からの助成金も3年ほどいただきました。朝日座を近代化産業遺産にも取り上げていただきましたところ、県内各地の古い映画館を残そうという機運が高まってきたました。

震災後を含めいろいろな問題があつても、南相馬に生きるものとしては、やはり町の中が元気を出さなければいけません。これまで市街地活性化事業の中心に朝日座はあったのですが、なかなか動きませんでした。しかし、今後は朝日座だけでなく、町中に残っている歴史ある銘醸館（老舗の蔵元の建物）や朝日座の次にできたという古い眼科の建物、お醤油屋さんなど、味わい深い建物のマップづくりをしながら、南相馬の再生をしなければいけないと話しあっています。

いままだ高校生は町の中にいませんが、そうした活動を継続ながら、高校生にも力になつてもらえるような、子どもたちも一緒に育つていけるような町にできたらいいなと思っています。

—鈴木 「懐かしい」という感覚を持っているのは人間だけだそうです。私たちは3.11によって、「懐かしい」ということを大切にいかなければいけないということを身にしみて感じました。地方には地元の人も忘れてしまったような劇場がいくつも残っていますから、この座談会がそうした映画館、劇場をこれからどう活かし、まちづくりにつなげていくかを考える一つのきっかけになればと思います。ありがとうございました。

